

## 第二卷解説

### 一 マルクス・レーニン主義の受容

本巻は、陳独秀が主に中国共産党（以下、適宜中共と略称）の指導者として活躍した時期の文章を収録する。具体的には、党結成に向けて具体的な行動を開始した一九二〇年秋から二〇年代半ばの国民革命を経て、やがて党指導者の地位を逐われ、トロツキストとして中共に決別するまでとなる。当時の彼の地位からすれば当然ではあるが、この時期の文章の大半は、中共の最高指導者として執筆・発表した政論、政治評論である。

周知のように、中国共産党は一九二〇年代初めに、陳独秀が中心となって結成したものである。むろん、コミンテルンからの働きかけという外的要因は無視できないが、社会主義にめざめ、それに中国の前途を見いだした中国青年たちの決意と行動がなければ、共産党は生

まれない。そうした人的ネットワークの中心を占めたのが、陳独秀その人である。そして、北京では李大釗、張国燾らが、上海では李漢俊、李達らが、広州では譚平山らが、その彼を支えた。一九二一年七月に中共が最初の党大会（陳独秀自身は出席せず）を上海のフランス租界で行った際、全国の黨員数は五十人余り、間もなくその数は中国国民党との合作（国共合作）、国民革命を通じて急速に拡大する。活動力旺盛な青年黨員たちにとって、最高指導者・陳独秀の声望は絶大であった。党指導部のメンバーたちは、親しみを込めて彼を「老頭子」と呼んだが、党結成の中心人物が彼でなかったら、初期の中共があれほどの結集力を持つことはなかっただろう。ひとえに『新青年』主編として培った名声とカリスマ性ゆえである。他方、そうしたカリスマ性と表裏をなすのであろうが、彼をよく知る者の多くは、陳独秀の性格として、激しやすさ、癩癥を挙げる。日常の応接から党の会議に至るまで、カッとやるや机を叩くのは当たり前、何事においても人に反論を許さず、独断専行だった。よく言えば、このエネルギーがあればこそ、新文化運動や中共結党をはじめとするブレイクスルーを成し遂げられたとも言えよう。

さて、儒教に代表される旧文化の全面的刷新を掲げて出発した陳独秀と『新青年』は、一九一九年を境に社会主義・マルクス主義を紹介し、労働運動を論じ、実際の政治や運動に関わっていくようになる。陳独秀は、一九二〇年半ばの四ヶ月の休刊を挟んで同年九月に『新

青年』を再刊したさい、レーニン主義への転向宣言とも言える「政治を語る」（本書第一巻所収）を巻頭に掲げたが、それこそは、政治や政局を語らないことを掲げて創刊した『新青年』の従来の姿勢に別れを告げるものであった。そして、その休刊期間にあったものこそは、ソヴィエト・ロシアからの使者（ヴォイチンスキー）の来華と陳独秀への接触、それに引き続き共産党結成への準備活動であった。

中国における社会主義・マルクス主義の受容は、これまで様々に論じられてきた。毛沢東にいたる中国のマルクス主義は、いかなるルートと特質を持つのか。陳独秀や李大釗といった初期共産主義者に関する研究は、ごく単純に言えば、人民共和国成立以後、冷戦体制の終結まで、その関心からなされたと言ってもよいだろう。そして、それらの研究においては、毛沢東に至るある種の土着性や中国の特殊性のルーツを李大釗の中に見いだし、それをプラスに評価することが一般的だったように思われる。それに対して陳独秀は、彼が国民革命における共産党の敗北の責任者だとされたこともあり、機械的なあるいは教条主義的なマルクス主義理解の域を出なかったと評されることが多かった。確かに本巻に収める一九二〇年代初めの社会主義解説の文章を読むと、とりわけ今日の目から見ると、彼のマルクス主義理解は面白みに欠けると言わざるを得ない。李大釗のようなある種の「曲解」や強引な読み込みというものがなく、そもそも様々な社会主義の中で、なぜボリシェヴィズムというロシア

型社会主義運動に倣<sup>な</sup>わなければならぬのかという根本問題をめぐって、迷ったり悩んだりした形跡がほとんどないのである。本巻所収の「社会主義批評」や「私の婦女解放観」「蔡和森に答えて」を読んでも、陳独秀ならではのマルクス主義理解を取り出すことは難しい。あまりにもありきたりなのだ。

これは陳独秀に限らず、中国の社会主義運動自体の歩みに関わることだが、実は中国の社会主義やマルクス主義は、一九一九年以後の目覚ましい流行とは対照的に、それまでの前史というものをほとんど持たない。確かに清末の革命運動の中で、マルクスを含めて社会主義は紹介されてはいたものの、それが国際的な共産主義運動（第二インター）に連携するようなことにはならなかった。辛亥革命後の数年、中国では社会主義はまったくの下火だったし、陳独秀も一九一九年まで、まともにマルクス主義を紹介したような形跡はない。にもかかわらず、一九二〇年九月の「政治を語る」では、マルクス主義がいかなるものか説明されないまま、「レーニンの労働専政」が承認され、「階級戦争」と「政治的・法律的強権」でブルジョワジーの古き政治を打ち壊すことが主張されているのである。その傾向は、本巻に収録する一九二一年一月の講演（「社会主義批評」）でも同様である。さらに注目すべきは、アナキズムとともに、中国にはまだ実体もなかったドイツ社会民主党流の社会民主主義勢力（修正主義、議会主義）が、マルクスの意思を歪めたものとして、延々と批判されていることである。

これらは、陳独秀のふれて共感したマルクス主義が、その出発点において、すでにレーニン流のマルクス主義であったということを物語っている。西洋諸国（および日本）の社会主義政党であれば、第二インターと関わり、それとの決別を経てポリシエヴィズムへ行き着いたわけだが、陳独秀ら中国の社会主義者は、他の先進国が紆余曲折を経たのちに到達した地点から出発しているのである。今日のわれわれが陳独秀の社会主義論を読んでも、オーソドックスすぎて面白みを感じないのは、そうした事情が関係しているのである。もっとも、彼の声望と当時の青年知識人の社会主義理解のレベルを勘案すれば、経済発展段階や下部構造論（あるいは唯物史観）から諸々の事象を明快に説明する彼の社会・歴史評論が十分に青年たちを引きつける内容であったということは、大いにあり得る。従来より筆鋒の鋭さで定評のあった彼の文化評論や伝統や世相への批判が、それら社会主義の理論武装を経て、さらに鋭利になったというわけである。

本巻でいえば、キリスト教と資本主義の関係を論じてその中国での布教活動に反対した「キリスト教とキリスト教会」や、東西文明論争（あるいは西洋科学によって人生の問題は解決するかをめぐって行われた「科学と玄学」論争）への論評たる『科学と人生観』序」なども、本的には唯物史観や科学の客観性を中心とする社会科学の視点を論拠に据えたものである。当然に東西文化比較の問題に対しても、彼はアンチ東方文化派の姿勢を崩さず（寸鉄・精神

生活と東洋文化」、折から訪中した詩聖タゴール（ノーベル文学賞受賞者）に対しても、「私はお尋ねしたい。あなたが「愛」の叫び声を上げたら、欧米のブルジョワジーは感動して人類相愛を実行してくれるのか。連中は自分から資本帝国主義をやめてくれるのか。労働階級からの搾取や弱小民族への侵略をやめてくれるのか」と辛辣な論評を発表している（「タゴールの杭州、上海での演説を評す」）。新文化運動の当初から、陳独秀のスタンスは、西洋文明をある意味で愚直に肯定するものだったが、マルクス主義を受容したあとになると、発展段階論の色彩がより濃くなり、東西文化の違いとは、端的に言えば、歴史発展の遅速の差に過ぎないという結論になっていく。

新文化運動以来の伝統批判ということ言えば、中共結成に相前後して発表した無政府主義者・区声白（おうちせいぱく）との応酬の書簡（「無政府主義に関する議論——区声白の書簡に答えて」）に、陳独秀らしさを見て取ることができる。両者の応酬は、世に「アナボル論争」と呼ばれるもの中国版だが、ほぼ同時期に書かれた陳の「随想録——中国式の無政府主義」（本巻所収）などをあわせ読むと、社会主義の一派としての無政府主義を批判しているというよりも、中国伝統文化への批判の要素が強いのではないかという印象を受ける。彼によれば、中国の無政府主義とは、イズム以前に、老荘由来の虚無思想や中国の国民性の内に潜む怠惰、放縦の表れなのである。西洋民族は「戦争本位、個人本位、法治本位、実利本位」であるのに対し、東

洋民族は「安息本位、家族本位、感情本位、虚礼本位」だと断言した一九一五年の「東西民族の根本思想の差異」（第一巻所収）の彼の価値観は、その後社会科学の装いをまとうようになって、基本的には変わらなかったと言えよう。

## 二 共産党を率いて

文化や社会を扱った以上の評論が、いわばかなり高踏的、抽象的なものであるのに対して、政治家、共産党の指導者として執筆した政論や書簡から伝わってくるのは、革命家として時に多くの人命が左右される決断を迫られ、奮闘し苦悩する彼の姿である。彼が結成した中共は、コミンテルンの重要な支援・指導の対象であり、他方その助言に基づいて推進された国共合作のおかげで、結党後数年にして、実際の政治活動、社会運動において相当の実力を持つ存在へと成長した。陳独秀は、北京大学の教員や『新青年』の主編の時には想像もできないような、現実社会を動かす力を持つに至ったのである。だが、中共指導者としてそうした力を持つということは、中共にとって本山にあたるモスクワのコミンテルンとの折衝に心を砕くということや合作のパートナーである国民党との関係調整という重荷を背負うというこ

と引き替えてもあつた。

一九二四年から本格的に行われた国民党との合作、いわゆる国共合作は、共産黨員が個人の資格で国民党にも加入し、国民党の活動を担うという方式、すなわち「党内合作」という特殊な形態のものであつた。確かに党の格や歴史に大きな開きのある以上、国共兩党の実情に合わせようとすれば、それしかなかつたであらうが、社会主義革命を目指すことに最大の魅力と存在意義を見いだしていた黨員大多数の望むものではなかつた。国民党首領の孫文がそう要求し、コミンテルン（とりわけその代表のマーリン）がそうしろと命ずるから、やむなくその提案を飲んだにすぎないのである。そうした心情は、陳独秀とて半ば同じであり、国民党への懸念を纏々述べるヴォイチンスキーへの書簡（一九二二年四月）には、悩める党指導者としての彼の姿が浮かび上がる。

初期の中共関係者の回想を総合すると、結党当時、そもそも陳独秀は中国の共産党がモスクワのコミンテルンの意向や指導に従わなければならないとは考えていなかったふしがある。コミンテルンから活動資金をもらうことには抵抗したようだし、コミンテルンの代表が自分の頭越しに自党の黨員を指導・差配すると、あからさまに横やりを入れた。そんな民族主義者の彼の姿勢が変わったきっかけは、結党まもなくの一九二一年十月にフランス租界警察に逮捕された際に、当のマーリンが釈放に向けて、保釈金（罰金）の検出をふくめ、奔走して



くれたことだった。<sup>(2)</sup> それ以後、陳独秀はコミンテルンから経常的に経済支援を受けとるようになった模様である。

ただし、陳がそのコミンテルン観を改めるのに、より大きくあざかったのは、彼自身が一九二二年秋にコミンテルンの第四回大会に出席するために、モスクワを訪れたことではなかったか。一九一九年のコミンテルン創立大会から二一年の第三回大会まで、中国人参加者はどの大会にもいたが、コミンテルン大会に参加するためにモスクワを訪れた正式の中共代表は二二年秋の陳独秀らが最初である。中国共産党の、そして陳独秀の国際共産主義運動への名実備わったデビューであった。

だが、コミンテルン大会での陳独秀の存在感はきわめて薄い。彼自身が大会で演説の場に立つこともなかった。ひとえに外国語ができなかったからで、中国代表の大会演説は、代わりに北京大学出で英語の堪能な劉仁静りゅうじんせい（のち劉もトロツキストとなる）が行っている。中国でこそ知らぬ者のない陳独秀だが、国際共産主義運動の総本山では、まったく無名の中国代表に過ぎず、コミンテルンの指導者たちが彼を特別に厚遇したということもなければ、個別に意見交換の場を設けるといふこともなかった。また、陳は大会が選出したコミンテルン執行委員にも入っていない。率いる党はできたばかり、会議では自分は無名、そのうえ世界の同志たちと語らうにも、外国語によるコミュニケーションがはかれないのだから、彼が「坐っ

ているだけ」の中国代表になってしまったのも、余儀ないことであつたらう。

党の指導者として、それまでも国共合作を推進するために、「造国論」や「国民党とは何か」といった文章（共に本巻所収）を発表し、それなりの理論構築をしていた彼ではあつたが、一九二三年初めにモスクワから帰国して後は、同道帰国した瞿秋白（新聞特派員としてモスクワ滞在中に入党した青年で、コミンテルン大会期間是中国代表団の通訳・助手を務めた）とともに、合作推進に向けて党内の意思を統一すべく、国民革命の理論をさらに練り上げていくことになる。中国ブルジョワジーの類型を分析し、国民党に革命的ブルジョワジーを指導して民主主義革命を遂行するよう呼びかけた「ブルジョワジーの革命と革命的ブルジョワジー」、そして国民革命において各階級が果たすべき使命を分析した「中国の国民革命と社会各階級」（共に本巻所収）は、その代表作である。ちなみに、この二篇の文章はやがて陳独秀の失脚後に、彼の誤った革命論——二回革命論（後述）——の鉄証として、断章取義的に引用されることになる。

だが、そうした理論武装を経てこぎつけた「党内合作」による国共合作は、とりわけ一九二五年三月の孫文の死後、軋みを見せることになる。共産党は国民党に「寄生」して乗っ取るうとして、国民党の純粹を護るために「三民主義」による思想・信条の徹底統一が必要素とする声が国民党の元老たちを中心に大きくなっていったのである。その代表格で孫文

の側近だった戴季陶たいきとうはパンフレット『国民革命と中国国民党』（一九二五年七月刊）を書いた。また、国共合作・連ソ容共の象徴である広州郊外の黄埔こうほつに設けられた軍事幹部養成学校、すなわち「黄埔軍官学校」でも、共産党員ら左派系学生と反共派の学生の軋轢が増すなか、校長・蒋介石がそれを仲裁・緩和する一方、尊大な態度をとるロシア人顧問やその威勢を借る共産党員への警戒感を強めていった。一九二五年九月と翌年六月に、ともに公開書簡として、党の機関誌『嚮導』週報に発表した「戴季陶への書簡」と「蒋介石への書簡」は、反共傾向を強めるそれら国民党の指導者にあてた、強い調子の抗議書簡と言ってよいものである。とりわけ後者は、一九二六年三月二十日に広州で起こったクーデター疑惑「中山艦事件」（国民革命軍海軍の砲艦「中山」の出動を、中共、およびソ連による反乱と見なした蒋介石が、広州に戒嚴令を布いてそれら勢力をいったん管制下においた事件）が、共産党に対するいわれなき迫害であることを、逐条数え上げて弁明したものである。

こうした軋みはやがて修復不可能なまでに深刻化し、他方それにもかかわらず合作継続を求めるコミンテルンの方針は変わらぬまま、陳独秀と中共指導部は一九二七年の悲劇を迎えることになる。その悲劇に至る党指導者としての言動を述べるに先立って、共産党結成以後も続いた文化人、士人、そして個人としての陳の交友について、一瞥いちべつしておきたい。

### 三 胡適との交友

一九二〇年代、中共の指導者を第一の属性とした彼の書いたものは、やや型にはまったマルクス主義者のそれが多いが、その一方で、彼が政治的見解を異にするに至った旧友とも友情を保つことのできる懐の広さを持っていたことも指摘しておく必要があるだろう。その典型は胡適との交友である。第一巻所収の『新青年』同人の書簡の応酬からもわかるように、雑誌に集った同人たちは、やがて雑誌の運営や方針をめぐって考えを異にするようになり、北京の友人・同人たちの多くは『新青年』の編集から手を引いた。誌面に共産主義文献や革命ロシアの紹介記事が目立つようになった一九二二年初め、「今や『新青年』は、ほとんど『ソヴィエト・ロシア』の中国語版となってしまった」と不快の念をあらわにし、陳独秀と袂を分かったのが胡適であった。彼は共に育んだ『新青年』を陳に引き渡し、自らは一九二二年五月に『努力週報』を別に立ち上げた。従来中国では、マルクス主義に反対する胡適は、『新青年』の分裂後、さっそくブルジョワ自由主義者の旗を掲げて雑誌『努力週報』を創刊し、共産党への攻撃を始めた、とされた事態である。それゆえ、普通なら絶交に至っても不思議ではないところだが、二人はその後互いの言動に注意と関心を払い、厳しい言葉の

中にも相手への敬意を忘れない士人の關係を保ち続けた。

聯省自治運動に関わろうとする胡適へ好意的忠告をする一九二二年九月の書簡、モスクワから連れて帰ったばかりの瞿秋白が書いた革命ロシア紀行文の出版斡旋を依頼する翌年四月の書簡、いずれも胡適を一流の文化人として尊敬する様子がうかがえる。また、一九二四年秋の第二次奉直戦争、北京政変後に政界刷新の機運が生まれ、胡適がいわゆる有識者の代表として善後会議に加わるとの報が流れたさいも、陳独秀は即座に書簡を送っている。当時の共産党は、この善後会議を軍閥と政客の結託による談合に過ぎないとして反対の姿勢を打ち出していた。そんななか、陳独秀は杓子定規に胡適の参加を全面否定するのではなく、海千山千の政界の連中に利用されないよう、懇切な態度でアドバイスを送るのみならず、参加する以上は「国家や人民のために発言してほしい」し、「可能な範囲で」よいから、「言わなければならぬことはい、この機会に胡適が余人とは違うのだということを示してほしい」とエールを送っていた。陳独秀と胡適の歳の差（陳が十二歳も年上）を考慮するならば、かつての雑誌同人にして「新文化運動」の同志、そして誰もがうらやむほどの才能を持つ中国文藝界のホープに対し、人間として士人として、そして同じ安徽人として（？）、胡適に政治的立場の相違を越える敬意と期待を抱いていたことが知れよう。他方、胡適は共産党の先鋭な反帝主義やプロレタリア独裁の論理に違和感をぬぐえず、さらにはそうした独善的な意見を

振りかざす陳独秀にたいして、例えば一九二五年末には「もはやわれわれは友ではなく、仇敵と言つてよいでしょう」という絶交状をしたためるほどであった<sup>(3)</sup>（ただし、投函されず）。

だが、中共指導者として権勢を振るっていた陳がその地位を逐<sup>\*</sup>われ、トロツキストの活動ゆえに逮捕（一九三二年十月）・投獄されたさいには、胡適は救援活動に加わっている。もっとも、大物・陳独秀の逮捕にさいしては、彼の知名度と交友関係の広さから、胡適以外にも「絶交」状態にありながらその救援・支援にあたった人士がかなりいたということも、指摘しておかねばなるまい。晩年の陳独秀と胡適の関係については、陳の遺著の件もあるので、第三巻の解説がふれることになるであろう。

ここでは、陳独秀の一生を総括する言葉としてよく知られている「終生の反対派」が胡適の命名になること、そして新文化運動の両巨星として並称されることの多い二人が文章執筆のスタイルで対照的だったという証言のあることのみを附記しておく。雑誌『新青年』の発行元・亜東図書館の編集者で、二人をよく知る汪原放<sup>おうえんほう</sup>によれば、胡適は下調べをじっくりして最後に清書する几帳面な書き手だったが、これにたいして陳独秀は、調べものをしたりせず、筆のおもむくまま一気呵成に書く人間だったという<sup>(4)</sup>。言われてみれば、なるほどこの時期の陳独秀の文章には、出典の注記や注釈のあるものがほとんどない。こうした執筆スタイルは、陳の文章を躍動感あるものにした一方で、文章に内省や熟考の跡があまり感じられな

いことの一因なのかもしれない。

#### 四 国民革命の嵐の中で

緊張の度を増していた国民革命と陳独秀率いる中共に話をもどそう。国共合作体制のもとで推進された国民革命の運動は、国共の軋轢をはらみながらも、一九二六年夏には、国民革命軍による北方への軍事攻勢、すなわち北伐へと発展した。北伐が予想外の快進撃により、半年ほどで長江まで達したこと、一九二七年三月には南京、上海という経済先進地が国民革命軍の占領下に入ったこと、だがその過程で国共合作は大きく揺らぐことになり、一九二七年四月の蔣介石（国民革命軍総司令）による上海での反共クーデターを境に共産党への逆風が強まり、同年七月には合作を継続していた武漢の国民党および国民政府も、共産党と手を切るに至ったこと、これらはいずれも中国革命史の事件として、あまりにも有名である。

そして、この一連の激動の中で、中共がイニシアティブをとることに失敗し、結果として国民革命を完遂できぬまま、かつての友党・国民党からの弾圧を受け、党勢を大きく減じて地下活動へと追いやられたことも、よく知られていよう。長きにわたり、それら共産党の敗

北の責任と誤りは、陳独秀が革命情勢を正しく把握できず、主体性を放棄して国民党に妥協を重ねたからだと言われてきた。これを通常、陳独秀の右翼日和見主義ひよりみと称する。「右翼日和見主義」、これこそが陳独秀に貼られた最大のレッテルであり、これを貼られたがゆえに、彼の生涯は（特に中国では）まっとうに評価されなかったのである。

中国では、かれの右翼日和見主義は、一朝にしてなったのではなく、節目節目を経て段階的に形成され、深刻化したと見なされてきた。陳独秀の三度にわたる対国民党譲歩と呼ばれるものがそれである。一度目は、一九二六年初めの国民党第二回大会にさいして、その中央委員により多くの中共黨員を送り込める情勢であったのに、陳は国民党の保守派黨員を刺激するのをはばかり、その数を減らしたこと。二度目は、一九二六年三月の「中山艦事件」のさい、戒嚴令を布いて共産党を屈服しようとした蔣介石に反撃の構えすら見せず、無抵抗に終始したこと。そして三度目はその中山艦事件で力をつけた蔣介石の国民党が、同年五月に共産黨員の国民党中枢での活動を制限する「整理党務案」を突きつけてきたさいに、それを受諾したこと、である。こうして、国民党に妥協するあまり、自らの力を伸ばし革命運動のイニシアティブをとるチャンスのみすみす逃がした結果、一九二七年に国民党が反共に転じたさいに、有効な対応をとれなかったのだ、というのである。

一方、理論の面では、陳独秀は「二回革命論」として総括される誤った革命論を当初



より持つていて、それが右翼日和見主義の根底にあったのだとされた。二回革命論とは、ブルジョワジーの指導する民主主義革命と、そのあとに来るべきプロレタリアート指導の社会主義革命を段階的にはっきりと分ける考えである。中国でいえば、国民革命の段階ではブルジョワジー、国民党の指導性を承認して、いたずらにプロレタリアートの指導性を強調しないという誤った革命論として理解された。党の指導者がそんな考えだから、国民党に譲歩ばかりするはめになったのだという理屈で、陳は弾劾されたのである。さらに失脚後には、彼の癩癖や独断専行といったパーソナリティも、「家父長的作風」と指摘されることになった。

むろん、以上の解釈やレッテル貼りは、彼が失脚した一九二七年以降になされたものである。では、いったい誰がそんなふうなレッテル貼りをしたのか。一九二七年初めに、中共の政策が「日和見主義」の危険を帯びていると言いだしたのは、中国（上海）にいたコミンテルン代表（例えばナツソノフ）たちである。中国人では、彼らに頻繁に接触していた瞿秋白が同年春に執筆した中央への異議申し立てのパンフレット『中国革命中之争論問題』で、中共の病根を「日和見主義」と述べている。この時点では陳独秀の名前は冠されていないが、やがてこの年の後半になると、「陳独秀のごとき日和見主義の傾向」（ブハーリン）というように両者をつなぐ用例があらわれるようになる。いうなれば、陳独秀にそもそも「日和見主義」のレッテルを与えたのはモスクワであった。それが陳独秀のトロツキストへの転身と中

共離脱を境に、遠慮のない名指し批判（陳独秀主義）へと転じていったわけである。

だが、そうしたものをハッキリと「陳独秀右翼日和見主義」と定式化し、さらにそれを「右翼投降主義」に格上げしたのは、一九三七〜三八年の中共であり、具体的にはその時期に党の歴史の見直しを通じて、自らの地位を確立しようとしていた毛沢東であった。実は上述の三度にわたる対国民党譲歩という言い方も、毛沢東が旗振り役となって行った歴史決議（若干の歴史問題に関する決議、一九四五年）作成の過程の中で、周恩来が一九四三年に提示し、それがそのまま人民共和国の党史の叙述に組み入れられたものである。同様に、陳独秀の革命論を「二回革命論」と解釈したのも、前述の瞿秋白、そしてさらにそのあとに党の指導者となった李立三<sup>（リリッさん）</sup>らであり、それが人民共和国でも継承されたのだった。<sup>（5）</sup>ソ連共産党コミンテルンの側だけが貼り付けたレットテルならまだしも、それを継承し、さらに定式化した中共の決議や『毛沢東選集』<sup>（6）</sup>にも盛り込まれたレットテルとあっては、そう簡単にははずれない。陳独秀の評価の問題が、中国で長期にわたって決着を見ない理由はそこにある。

評価の問題を論ずる前に、陳独秀が本当に「二回革命論」を奉じ、国民党への譲歩・妥協のみを事とする指導者だったのかを見ておこう。まずは「二回革命論」だが、その代表作とされる本巻所収の「ブルジョワジーの革命と革命的ブルジョワジー」、「中国の国民革命と社会各階級」を先入観なく読めばわかるように、彼は決して中国プロレタリアートの力量を全

面的に否定してはいなかった。また、後者の「労働者階級は量的に未熟であるばかりでなく、質的にも未熟なのである」というくだりも、それゆえにブルジョワジーとの連合戦線が必要なのだという文脈で現れたものである。彼がブルジョワジーの革命とプロレタリアートの革命を前後に画然と分け、第一段階たるブルジョワ民主革命でプロレタリアートの役割を抑制せんとする「二回革命論」者だったというのは、明らかに不当な議論である。<sup>(2)</sup>

では、実際の政策面ではどうか。これも先に結論を言えば、国民党との統一戦線継続、国共合作維持を最優先の方針とし、そのためには国民党（蒋介石）への譲歩も必要だとしたのは、陳独秀というよりも、むしろコミンテルン、ソ連共産党、そしてスターリンであった。陳独秀は、いわばそうしたモスクワの意向を受け、意に沿わぬ妥協政策を強いられたと言った方が事実に近い。いくつか例を挙げよう。

例えば、共産党の活動に大きな枷かとなった党内合作について、中共の力が強くなり、党内合作というスタイルが逆に国共関係をギクシャクさせる要因となると、陳独秀はコミンテルンに対して、それを解消し（中共黨員を引き上げ）、党同士が政策を協議して連合するスタイル（党外合作）に改めるよう、たびたび訴えていた。一九二六年三月の中山艦事件の後に蒋介石に送った公開書簡（本巻所収）でこそ、陳独秀は「共産党の中で」国民党との合作という政策問題が生じたことはありません」と述べてはいたが、実際には「党内合作」継続の可否

は、中共では絶えず問題であり続けたのだった。

この時期に陳独秀の近くで働いていた鄭超麟<sup>ていちょうりん</sup>は、本巻に収録する「全党同志に告げる書」などに基づき、少なくとも陳は四度も共産党員の国民党からの退出をコミンテルン（あるいはその代表）に求めたものの、いずれも却下されたと伝えている。一度目は一九二二年の西湖会議のさい、二度目は二五年九月の中共中央拡大会議のさい、三度目が二六年三月の中山艦事件のあと、そして四度目が二七年五月の馬日事変ののちであり、そのほかにもあるはずだと述べている。<sup>(8)</sup>この回想は、ソ連解体後に公開されたコミンテルン文書によって裏づけられる。たとえば、上記の回想でいう三度目の提案を陳独秀らがしたさい、四月末に開かれたソ連共産党中央政治局は、国共の決裂は「絶対に許容することはできない」「共産党に国民党内に留まる方針を実行させる必要がある」という結論を出して、それを中共に伝達したのである。<sup>(9)</sup>

当時、ソ連から広東に派遣されていた国民党顧問のボロディンやモスクワのスターリンらは、国民党の力量を高めに見積もり、国民革命の主力はあくまでも国民党であると見ていた。なかでも国民党（蔣介石）を高く買っていたのがスターリンである。スターリンは、蔣介石を信頼に足る革命派軍人と見なし、最大限彼をつなぎ止めておくべきだとする一方、共産党があまりに反帝運動を急進化させると、英米日などの列強が干渉に乗り出す危険があると恐

れていた。それゆえに、一九二七年三月、国民革命軍の進駐するところとなった上海で、労働者武装糾察隊と蒋介石ら国民革命軍の軋轢と緊張が高まると、スターリンは中共中央にたいて、労働者の銃器を隠して蒋介石の軍隊との衝突を回避せよ、租界を攪乱するような騒擾は起こすなと命じる指示を送ったのだった。これより先、陳独秀率いる中共系労働者武装糾察隊は、国民革命軍が上海に近づくなか、三度目の武装蜂起を試み、上海（租界地区を除く）から軍閥軍を駆逐することに成功し、臨時政府を樹立していた。上海は革命の都だったのである。その頃に陳の書いた「われわれの目下の闘い」（本巻所収）からは、高揚する革命情勢、そして彼の興奮ぶりが伝わってくる。それだけに、彼らはスターリンからの指示に愕然としたに違いない。半月後、その指示に基づいて隠忍自重いんじんじゆうした中共を襲ったのが蒋介石の反共クーデターであった。

そしてきわめつけが一九二七年の五月指示である。陳独秀ら中共が主導した上海臨時政府やその後ろ盾となった労働者の武装糾察隊は、蒋介石の四・一二クーデターの一撃によりあつげなく壊滅、その蒋介石が政府を打ちたてた南京をはじめ、杭州・広州などでも同様の粛清が続ぎ、江南や華南の経済先進地は、あらかた「反共派」国民党の支配に帰した。これより先、クーデター直前の四月六日に、陳独秀は武漢に向けて上海を離れていた。武漢到着は十日、その直後に蔣のクーデターが起こったわけである。陳独秀をはじめ中共中央が武漢に

移ったのは、武漢の国民党および国民政府が蔣介石とは違って、共産党との連携を維持する正統政権だったからである。

武漢に移った中共中央は、汪精衛ら国民党首脳と共に、蔣の所業と南京での政権分立を激しく糾弾した。だが、正統の名目はともかく、軍事的にも経済的にも劣勢の状態に置かれた武漢の国共連合政権は、歯止めの効かなくなった農民運動、民衆運動と、それを共産党の仕業と目して敵意を募らせる軍人たちの反乱に直面し、事態を收拾する力を失いつつあった。

一九二七年五月には、共産党は正常な社会秩序を回復するべく、また国民党の信頼をつなぎ止めるためにも、民衆運動の沈静化に乗り出さざるを得なくなった。

そこへもたらされたのが、コミンテルンの決議（五月三十日）を箇条書きにまとめた指示電、俗に言う「スターリンの五月指示」である。指示は、陳独秀がその後「全党同志に告げる書」で公表したように、土地革命の断固実行、武漢政府と国民党の再改組、二万人の共産党員の武装、五万の労働者・農民の国民革命軍への加入、反動的な武漢の将領の処罰など、国民党が到底受け入れるはずもない政策を、国民党にとどまっただまま、左派と協同して実施するよう命じるものであった。党内合作を解消することは、この期に及んでも許されなかったのである。

六月初めに到着したその指示の受け入れをめぐって、中共指導部と武漢駐在のコミンテル

ン代表はもめにもめた。本巻には、「指示」の受諾確認を迫るモスクワからの電報が相次ぐなか、延々と行われた議論での陳独秀の発言（抜粋）と彼の名でモスクワに送られた回答電報が収録されているが、返電は「指示」が正しく完全に同意するとしながらも、具体的問題についてはその困難を列挙するものだった。体のいい拒絶にほかならない。これに対してモスクワから届いたのは、「われわれにはいかなる新たな方針もない……われわれは先の指示を繰り返す<sup>(10)</sup>」というとりつく島もない言葉だった。ここに陳独秀指導部へのモスクワの信任は決定的となり、あとはその背任を総括するのにどんなタームを用いるか、後継指導部に誰を据えるかということが残るのみであった。前者に関しては、言うまでもなく「日和見主義」という烙印が用意され、後者については、中共中央政治局のメンバーの中で、比較的早くから陳独秀の方針に反発していた瞿秋白が選ばれることになる。

この間、スターリンの五月指示の内容が、汪精衛ら国民党関係者の知るところとなったこともあり、武漢の国民党は七月十五日に党・政府・軍の共産党員の職務停止（つまりは国民党からの共産党員の追放）を決定、ここに国共合作は終わりを告げた。皮肉にも、陳独秀らが再三求めてもモスクワが許可しなかった国民党からの退出は、当の国民党から放逐されることで実現したのであった。これと前後して（七月十二日と言われる）共産党はコミンテルンからの助言により指導部を改組、すでに辞職を申し出ていた陳独秀は、そのしばらく前から

ら執務をやめていた模様である。そして、その彼に悲報が届く。党組織再建の使命を帯びて上海に留まっていた長子・陳延年が捕まり、七月四日に殺害されたという知らせだった。ちなみに、その半年ほどのち、次子の喬年も上海で国民党に検挙され、同じく刑場の露と消えることになる。陳独秀にしてみれば、まさに急転、奈落の底に突き落とされた一年であった。

中共新指導部の最初の仕事は、国民党の分共を受けて、コミンテルンの新たな方針を伝達し、新路線を話し合う場を早急に設けることであり、緊急の会議が八月七日に漢口の租界で開かれた。世に「八・七会議」と呼ばれるその会議は、瞿秋白によって主に取り仕切られたものだが、陳独秀は呼ばれなかった。会議での決定事項は二万字以上に及ぶ長大な文書にまとめられ、党内で伝達された。それまでの指導部については、果たして「日和見主義の誤りを犯した」と書かれてはいるが、陳独秀がその責任者であると名指しされているわけではない。党の幹部の多くが、それまでの路線や誤りが陳独秀個人によってたらされたのではなく、コミンテルンの方針に従ったに過ぎないということを理解していたのであろうと推測される。あるいは、党内の陳独秀への尊敬の念は、まだまだ強かったと言ってよいのかもしれない。

先にも述べたように、彼への名指し批判が強まっていくのは、陳がトロツキーの中国革命論を知り、おのれがモスクワによってスケープ・ゴートにされたのだと気づいて、スターリ



ンとそれに従う中共首脳部を公然と批判するようになってからである。それゆえ、指導部の中で活動することこそなかったが、一九二七年秋に上海にもどったかれは、折々に党の幹部たちの来訪を受け、自らも「撒翁」のペンネームで党機関誌に時評「寸鉄」を発表し、国民党を批判しつづけたのだった。ただし、本巻には寸鉄を雑誌一期分収録したが、辛辣な皮肉が目立つばかりで、理論的な思索の跡をうかがわせるようなものではない。

一九二七年の国共合作崩壊後、共産党は国民党による苛烈な弾圧にさらされた。そうしたなかで、陳独秀をモスクワに召致する話が何度か持ち上がったが、そのたびに立ち消えとなった。モスクワ・コミンテルンから見れば、陳こそは戦犯であるから、召致とは言っても、自己批判させ、反省させるための呼び出しなのは明白である。一九二八年にモスクワで開かれた中共第六回大会のさいも、彼に参加をうながす声があったようだが、コミンテルンにも革命失敗の責任はあるはずだという信念を固めつつあった彼は、出国・参加を肯<sup>がえ</sup>んじなかつた。かくて、中共第五回大会（一九二七年五月）まで最高指導者だった彼は、第六回大会では、中央委員にも選出されなかった。

歴史に「もしも」は禁物だが、かりに彼がコミンテルンからの召致に応じていたら、どうなったか。李立三の事例が参考になろう。一九三〇年に、かの「李立三路線」により、反インターの誤りを犯したとされた中共指導者の李立三は、更迭のちモスクワに召致されたが、

その後十五年の間、様々な理由をつけられてソ連にとどめ置かれた。いふなれば、懲罰的な抑留である。してみれば、陳独秀が一貫してソ連行きを拒んだことは、賢明な選択だったと言えるかもしれない。

## 五 トロツキズムへの旋回

党中央を逐われてのち、上海に閑居した陳独秀は、瞿秋白指導部が推進した暴動路線に懸念を示す上申書を三度にわたって提出（一九二七年十一月十二月）するなど、党の活動への関心を持ちつづけた。本巻に収録する「中共中央常務委同志諸兄への書簡」がそれであり、現下の情勢が党指導部が言うような革命の高揚期ではないことを説明し、方針の見直しを訴えるものである。書簡は、それへの党中央常務委員会の返書とともに党内刊行物に掲載されており、当時の中共指導部に陳に対する尊重と党内民主の気風がまだ残っていたことがうかがわれる。だが、返書は文面こそ丁寧なもの、陳の批判は当たらないとピシャリとはねつけるものであった。その後、一年あまりの沈黙を経て、陳独秀はより厳しい党中央批判をして、再び存在感を示した。「中東鉄道事件」への対応をめぐる中共がとったソ連擁護の宣伝方

針への批判である。一九二九年七月に、当時中ソ共同管理下にあった中国東北部の鉄道（中東鉄道——旧シベリア鉄道の中国領通過部分）を国民政府・張学良が武力接收し、それが軍事衝突にまで至ったのが「中東鉄道事件」である。中国国内に反ソ機運が高まると、中共はコミンテルンの指示を受けて、ソ連を擁護するキャンペーンを展開した。これに対して陳独秀は、「ソ連を擁護しよう」というスローガンは、そのままでは大衆に受け入れられないことを訴え、より適切なスローガンと手段によって宣伝を行えと党中央の姿勢を批判したのである。

当時の党中央を率いていた李立三は、瞿秋白ほど鷹揚ではなかった。陳独秀の第一書簡はそれへの党中央の反論とともに機関紙『紅旗』（八月七日）に掲載され、そのさいに党中央は「あなたが今後だされる重要問題への意見を受けとめる用意がある」とのコメントを附していたものの、そのわずか三日後に同紙に発表された李立三の論文は、陳独秀の見解を「きわめて重大な日和見主義」の誤りだと決めつけるものだったのである。その間に出された陳の第二書簡（本巻未収）はついに『紅旗』には掲載されず、十月になって『中国革命と日和見主義』というパンフレットに批判材料として収録された。そして、その翌月、陳独秀は、彼に同調した彭述之ほうじゆつしらとともに、党籍を剥奪されることになるのである。

ちなみに、党の政策や革命方針をめぐって中共の機関誌で戦わされた（すなわち黨員に開か

れた) 論争は、これが最後のものとなった。<sup>(1)</sup> 李立三指導部は、党内に潜在的な力を持っていたトロツキスト反対派にたいする闘争と日和見主義(陳独秀)にたいするそれを結びつけることを全党に命令、ここに陳独秀らは名実ともに中共の敵となり、以後トロツキズム運動へとつき進んでいくのである。

トロツキーの中国革命論、その中国における影響、および中国トロツキー派の生成については、本書第三巻が詳しく述べるであろうから、ここでは省略に従う。本巻収録の最後の二篇は、除名処分を受けた陳独秀が、処分に理のないことを訴えた抗議書ともいべきもの、そしていまやトロツキー派となった陳独秀の強烈な中共・コミンテルン・スターリン批判である。「全党同志に告げる書」で陳独秀は、国民革命時期の自らの責任については、これをしつかりと認めた上で、その責任はソ連・コミンテルン・スターリンも負わねばならないことを訴えた。国共合作に至った経緯、国民革命時期に発生した様々な国共の摩擦、そして国民党への譲歩の背景などなど、具体的な事例に即しながら回想・解説するその文章は、誠実な革命家の弁明書であると同時に、国民革命の歴史にかんする第一級の資料でもある。事実、この文章(第二巻解説)も、かなりの部分を「全党同志に告げる書」に負っている。

長期にわたって陳独秀に貼られたレッテルのため、中国ではこの「全党同志に告げる書」も「われわれの政治意見書」も、長らく反党宣伝、せいぜいが負け犬の遠吠えと見なされ、

まともに扱われることがなかったが、一読すればすぐにわかるように、彼の内省と沈思がトロツキー著作を通じて得られた覚醒と反応することにより、憤激となってほとぼしり出た傑作である。この二つの文章によって、陳独秀は中共と袂たもとを分かち、そしてコミンテルン・スターリンのくびきから自由になった。もっとも、彼はほどなく、トロツキストとして生き、真の革命家として活動することが、中共の指導者よりもさらに厳しい茨の道を歩むことを意味することに気づくのであるが……。

## 六 成敗を超えて

では、中共指導者時期の彼の活動について貼られたレッテル、すなわち右翼日和見主義という評価が、その後になつたかを最後に記しておこう。先にも述べたように、右翼日和見主義、ないしは右翼投降主義として陳の活動を総括したのは、一九三〇〜四〇年代の中国共産党の指導者、具体的に言えば毛沢東であった。その毛沢東は、実は陳への評価を将来的に見直すことを示唆していた。すなわち、一九四二年三月三十日に延安で、中共幹部を前に、党の歴史をどう把握すべきかについて演説したさい、「陳独秀は五・四運動の総司令である。

今はまだ陳独秀の歩みをわれわれが宣伝するような時期ではないが、将来われわれが中国の歴史を編纂するさいには、彼の功績について語る必要がある」と述べているのである。<sup>(12)</sup> 陳独秀が四川でこの世を去るわずか三ヶ月前のことであった。党指導者としての高みから歴代指導部の成敗を論じれば、確かに陳独秀の誤りは重大なものだっただろうが、一方でその毛にとっても、陳独秀の存在は特別なものであった。一九三六年秋に、かのエドガー・スノーに語った自伝で、毛は一九二〇年夏に陳独秀を訪ねた時の様子を率直に次のように語っている。

私の読んだマルクス主義の書物について陳と論議しましたが、自らの信念に関する陳の主張は、私の生涯のおそらく決定的な時期にあたって、私を深く感動させました。<sup>(13)</sup>

誤りはあっただろうが、党の創立期に陳の果たした役割は絶大であり、自分を含め当時の五・四青年たちをマルクス主義へと導いてくれたのは彼にほかならない、その思いが毛をして「陳独秀は五・四運動の総司令」と言わしめたのであろう。だが、当時の中共にとって、生ける陳はなお党への反逆者であった。今は功績を論ずる時ではないと毛が前置きしたゆえんである。

結局、毛沢東の生前には、右翼日和見主義者たる陳の評価が変わることはなかった。一九

五一年に准公式の党史著作たる『中国共産党的三十年』を胡喬木が上梓するにさいして、社会主義者としての陳独秀に関する表現を「最も影響力のあるマルクス主義宣伝家」から「大きな影響力をもつ社会主義宣伝家」に改めたいと、直々に毛沢東に尋ねたのにたいして、毛は「よろしい〔可以〕」と答えている。胡喬木はその前段で「陳独秀はけっして優れたマルクス主義者ではなかった」とわざわざ書いているが、それも毛のお墨付きを踏まえたため押しにほかなるまい。その後、陳の役割が党史著述の中でまともに語られることはなかった。毛が将来のこととした「歴史を編纂する」機会はついに訪れず、上記の毛の陳独秀評（彼の功績について語る必要がある）も、公表されたのは一九八〇年代になってからである。

毛の死後、党史研究が復活すると、陳独秀の評価見直しはただちに党史研究者のホットな話題となり、林茂生・王樹棟・王洪模「略談陳独秀」（『歴史教学』一九七九年第五期）のような文章が発表された。その後、「建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議」作成の過程で鄧小平が、その後さらに胡耀邦がそれぞれ、陳独秀に貼られたレッテルのうちいくつかについては客観的で、公正な見直しが必要だという認識を示したこともあり、関連する研究論文も多く現れるようになった。その結果、「漢奸」「裏切り者」というレッテルは基本的に剝がされ、新文化運動、五・四運動、中共結成にかんしては、彼の役割が相応に評価されるに至った。そして、国民革命時期の誤りについても、一九九一年刊行の公定党史『中国共産党

歴史』上巻で「陳独秀の右翼投降主義の誤り」と表記されていた部分が、二〇〇一年刊の新版（第一巻）では、「陳独秀を代表とする右翼日和見主義の誤り」に、誤りのレベルがトーンダウンしたのであった。

読者は、「何のそれしき」と笑ってはならない。中共党史の世界では、「投降主義」と「日和見主義」とでは、大違いなのだ。この時期、評価の見直しに大きな役割を果たしたのは、唐宝林氏（中国社会科学近代史研究所）をはじめとする民間の研究者グループ「陳独秀研究会」である。彼らはさらに、その「日和見主義」なるレッテルも再検討すべきだと主張して、精力的に活動を続けた。さらには、ソ連解体にもなつて、それまで機密扱いされたコミンテルン文書が公開され、陳独秀の誤りとされたものの多くがコミンテルンやスターリンの指示であったことが明らかにされた。にもかかわらず、「日和見主義」の誤りというレッテルおよびトロツキストとしての活動に関するマイナス評価は、容易には覆らなかつた。旧套の路線史観の影響は、牢固として抜きがたいのである。前述の中共の公式党史『中国共産党歴史』は、二〇一一年に第二版が上梓されたが、この最新版でも「陳独秀を代表とする右翼日和見主義の誤り」という表記は改まっていない。陳独秀研究会も二〇〇三年十一月に活動停止を命じられて以降、逼塞を余儀なくされている。いつの日にか、陳独秀に貼られたレッテルは、中共自身によって剥がされ、彼の功績が中国においても正当に評価されることになる



のか。現代中国研究者は、中国共産党の行く末と合わせて、それに注目し続けることになるであろう。

ただし、陳独秀自身はどうだろう。少し考えればわかるように、泉下の陳独秀は、おのれの歴史的評価が歴史家や革命運動の同志たちによって見直されることを望みはしても、今の中共——すなわち、もはや共産主義政党政党たることを自ら放棄し、陳独秀のつくった党とは似ても似つかぬ政権党となった巨大組織——から評価見直しのお墨付きを得ることに、どれほどの意味を感じるにたろうか。「終生の反対派」だった彼にとっては、願い下げだろう。彼が中国史上で果たした役割は、中共が公式見解として認めてくれるか否かという世俗的次元を超えるものだからである。

(石川禎浩)

- (1) 本巻の翻訳は、「短言」から「国民党左派・右派とは何か」までは石川禎浩が、「帝国主義とは何か 軍閥とは何か」以降は三好伸清が担当した。
- (2) 『包惠僧回憶録』(人民出版社、一九八三年)三〇～三一頁。
- (3) 耿雲志・歐陽哲生編『胡適書信集』上巻(北京大学出版社、一九九六年)三六七頁。

- (4) 汪原放『回憶亜東図書館』(学林出版社、一九八三年) 八七頁。
- (5) 江田憲治「陳独秀と「二回革命論」の形成」(『東方学報』第六二冊、一九九〇年)。
- (6) 『毛沢東選集』第一卷(人民出版社、一九五三年〔初版〕) 二三八頁。
- (7) 前掲江田論文。
- (8) 鄭超麟「陳独秀与国共党内合作」(『史事与回憶——鄭超麟晚年文選』第三卷、天地圖書、香港、一九九八年)。
- (9) 李穎『陳独秀与共産国際』(湖南人民出版社、二〇〇五年) 一五七頁。
- (10) 「ソ連共産党(ボ) 中央委員会政治局會議第一一二号(特第九〇号) 記録(一九二七年六月二十三日)」(ВКП(б), Коминтерн и Национально-Революционное Движение в Китае: Документы, Т. II. 1926-1927., Москва, 1996, с. 804-805)。
- (11) 江田憲治「中国共産党の党内民主主義」(『史林』第七七卷第六号、一九九四年)。
- (12) 毛沢東「如何研究中共党史(一九四二年三月三十日)」(『毛沢東文集』第二卷、人民出版社、一九九三年) 四〇三頁。なお、毛沢東は一九四五年四月二十一日の中共七大の予備會議の演説でも同様の発言をしている(『毛沢東文集』第三卷、一九四頁)。
- (13) 松岡洋子訳『中国の赤い星』上巻(ちくま学芸文庫版、一九九五年) 二二三頁。
- (14) 『建国以来毛沢東文稿』第二冊(中央文献出版社、一九八八年) 三六六頁。